

『玄義教相見聞』・『法華宗本門戒体見聞』調査報告

平島盛龍

はじめに

今般、大本山本興寺に格護されている慶林日隆著『玄義教相見聞』および『法華宗本門戒体見聞』を翻刻し、『法華宗全書 日隆2』（以下、『日隆2』）として刊行するに際し、次の如く原本の調査をおこなった。

一、調査日時 平成二七年六月一六日（火曜日）、午後二時三〇分～同五時

二、場所 大本山本興寺客殿

三、本山側立合 小西日遼御貫首宛下（法華宗教学研究所名譽所員）

四、調査員 平島盛龍（同所員）、三浦和浩（同研究員）

五、調査対象

① 『玄義教相見聞』（真蹟本、題簽は『玄義教相下』）

② 『玄義教相見聞』（写本）

③ 『法華宗本門戒体見聞』（直弟写本）

六、調査事項

- ① 紙数および継ぎ目の確認
- ② 消去文字（見せ消ち）の確認
- ③ 状態の確認
- ④ その他

両書の書誌的事情についてはすでに「大本山本興寺寺宝目録」をはじめ株橋諱秀稿「日隆聖人教学の序説」〔桂林学叢〕第四号所収）や大平宏龍稿「慶林日隆著『玄義教相見聞』について」〔日蓮教学研究所紀要〕第三〇号所収）・同稿「本門戒体見聞」について」（『日蓮教学研究所紀要』第二〇号所収）および「日隆2」別冊所収「解題」等に詳細な報告がなされている。本稿は、それらの内容をもととして、このたびの調査によってあらたに知り得たいいくつかの事実とそこから考えられたことを報告するものである。

「玄義教相見聞」調査報告

一、「玄義教相見聞」（真蹟本）の形態等について

本書は、全六七紙からなる卷子本である。現状は、文字の解説に関わるほどのものではないが、虫食い等による若干の痛みが確認される。使用されている料紙は、平均的には二三行幅程度のもので、これを継ぎ合わせた体

裁となっているが、第二六紙（七行幅）・第三〇紙（四行幅）・第三一紙（六行幅）・第四六紙（五行幅）など、まれに行数が極端に少ない場合がある。注意したい点は、⑦冊子本を卷子本に仕立てなおした場合に見られる紙の綴じ穴などが確認されないこと、①複数箇所紙の継ぎ目に前後の紙に掛かる文字の存在が認められること（第一五・一九・二一・二三・二四・三一・三三・四一・四二紙）、②紙背文書等は確認できないものの、紙を継ぐのりしろの下の方の紙に書かれた文字が確認されること（第二六・四五・四七紙）、③紙の継ぎ目の部分に切断されて判読不能の文字が確認されること（第一九・二四・二八・三一・四四紙）、④数行にわたる文章が消去または加筆訂正される場合があること（第九・一四・一七・二一・四〇・四四・五八紙）等である。これらことから、①本書は当初より卷子本であったこと、②料紙が非常に貴重であった当時の事情、③本書には草稿本が存在したであろうこと、④その草稿をもとに、あらかじめ継ぎ合わせた白紙の巻紙に隆師が直接浄書し、さらなる推敲を重ねながら最終的に卷子本に仕立てたものであること、等をうかがい知ることができる。

二、本書の正式名称について

このたび調査をおこなった文書は、隆師御真筆の卷子本一卷（以下、A本）と写本（以下、B本・本書解題に「筆者・所写年代不明の一本」と紹介）であり、この写本は冊子の形態で数量は一冊（二帖）である。末尾に記された識語^{〔1〕}によると、両本はともに貞享三年に本興寺第二八世日頭師（二六三―一六九一・以下、頭師）による修復を受けていることが知られる。すなわち「御聖教惣目録」（以下、頭師目録）中、「卷子本」の一覧に見える「玄義教相下一帖」と、いま一つは「縫本」の部に記されている「玄義教相見聞一帖」が、今回の調査対象となった諸本に相当すると思われる。

ところで、頭師目録に載せる卷子本および縫本については、両本ともに「隆師御真筆」という注記が見られる。しかしながら、実際に現存する御真筆は卷子本のA本のみで、B本は他筆による写本である。そうすると、A本とB本との名称の違いをどのように考えたらよいのかということ、共に、頭師は如何なる理由でB本を御真筆とみなされたのかという問題が生じるのであり、以下に所見を述べる。

さて、貞享三年に頭師は本書（A本）の修復をおこない、巻末（第六七紙）に次のような識語を載せている。

奉修復玄義教相見聞_下全部壹卷

貞享三^{丙寅}年正月廿三日

南無妙法蓮華經

日頭花押

この識語からは、貞享三年の正月廿三日に修復を終えたA本が卷子本仕立てで、全一卷であることが確認できる。名称については、「玄義教相見聞」とあることから、一見するとそれが本書の具名とされているようにも思われるが、「見聞」の部分に傍線を引き横に「下（しも）」と書込が見られるのであり、これも書名に関係しているように思われる。この点を緒とし、本書の正式名称についてこのたびの調査・検討から考えられたことを報告する。

まずはじめに確認しておきたいことは、全体の内容からうかがうことのできる本書の呼称についてである。頭

師の識語以外で、本書を表す呼称としては次のものが確認できる。

① 玄義教相下全（題簽、他筆）

② 玄義教相見聞一帖 本興寺常住（第一紙、貼り紙、真筆）

③ 教相下（第二紙・第四紙、真筆）

④ 玄義教相見聞一帖 本興寺述記（第六五紙、真筆）

①は、修復時に貼られた他筆による題簽である。②は、隆師の手蹟と推定される。但し、この文字が書かれた紙は本文の紙質とは明らかに異なるもので、卷子本の第一紙に貼られている。はたしてこの体裁がもとの紙であったのか、それとも頭師による修復時あるいはそれ以前に草稿などの別本から切り貼りされたものであったのか、いずれの可能性も考えられる。²⁾したがって、この貼り紙を以て直ちに本書の本来の名称とすることは一応さけておきたい。③は隆師の自筆であり、目次と本文との当初、都合二箇所に見られる。この表記から本書の墨付がはじまることからして、一応は名称との関わりを考慮に入れる必要がある。但し「解題」は、本文内容との関わりから推してこれを本書の名称とは見ず、「内容の全体的表示」としてゐる。④は、墨付の最末尾に書かれた隆師自筆の題号である。

そうすると頭師は、隆師自身による二つの呼称すなわち③の「教相下」と④の「玄義教相見聞」をめぐって思慮されたのであり、その跡が識語に表れているものといえよう。かくして、修復を終えた後に「玄義教相下全」という題簽が付されたということは、頭師にあつては③と④との折衷案ともいふべき題号を具名と定めたとも考えられよう。頭師目録の内容もそれを反映したものと見える。

しかしながら、A本と同時に修復されたB本の題簽および巻末の識語には「玄義教相見聞一帖」とのみ記さ

れているのであり、そのことからすると、頭師においていずれを正式名称としていたのかを確定することは些か難しい問題であるといえる。

このようなことで尔来、本書の具名については「玄義教相下」と「玄義教相見聞」の両様が用いられることになる。すなわち、株橋諦秀稿「日隆聖人教学の序説」（『桂林学叢』第四号所収、昭和三八年）は頭師目録をもとに隆師の名著を紹介するが、ここでは「玄義教相之下」を本書の名称としている。また『桂林学叢』第六号別冊（昭和四四年）は、「玄義教相見聞」と題して本書の訓み下しを載せている。さらに、平成三年に刊行された『大本山本興寺寺宝目録』に載せる「御聖教類」は頭師目録をもとに新たな調査内容を報告するものであるが、本書の名称については「玄義教相ノ下」としているのである。³⁾

而して平成一五年、本書の書誌について本格的に言及した大平宏龍稿「慶林日隆著『玄義教相見聞』について」（『日蓮教学研究所紀要』第三〇号所収）および同著「日隆聖人教学概論（稿）」（平成二七年）では、それぞれ「隆師による名称」・「日隆の命名」として「玄義教相見聞」を本書の具名と定め、異称ないし通称として「玄義教相下」・「一帖抄」を紹介している。

そしてこのたびの調査・検討からも、本書の正式名称についてそのように定めることが妥当であると考えられた。理由は、「玄義教相下」につき「隆師自身が、それも称したか否かは不明である」（大平前掲稿）からであり、なによりも墨付の最末尾に見られる④の「玄義教相見聞 一帖 本興寺述記」が隆師の手蹟であること即ち隆師の命名であることに相違ないからである。

なお、③の「教相下」については本稿も「解題」の所見を支持し、本書の名称ではなく「内容の全体的表示」と考えたい。

三、B本の価値について

B本の内容は、A本を横に臨みながら書写したものである様子をよく伝えるものであり、細部に至るまでA本と合致する。たとえば、返り点や送り仮名の付し方、「私云」の文章全体を段落すること、文脈が変わる際の余白の取り方など、できるだけ真蹟本の表記に忠実なものを作成しようという筆者の意図をうかがうことができる。また興味深いところでは、底本の二行に亘って同じような位置に同じ文字が並んでいる場合、誤って二行目をさきに書写してしまい後で書き損ねた箇所を行間に挿入したり（A本の第八紙を誤写したB本の八丁ヲ、同じ行を繰り返して写してしまふ（A本の第四二紙を誤写したB本の四七丁ヲ）といった、臨書にありがちな間違いなども確認される。このようなことからB本は、御真蹟であるA本を底本として作成された写本であることにほぼ間違いはなからう。

しかもB本は、こうした写本としての筋の良さに加えて、内題（本文に使用された料紙とのあきらかな違いから、修復前は表紙であったと思われる）に「玄義教相見聞 一帖 本興寺常住」、また墨付最末尾に「玄義教相見聞 一帖」と、いずれも隆師の筆跡かとも思われる書風で書名の書込が確認されるのである。ちなみにこの文字の筆跡は、真蹟本の巻頭に貼られた「玄義教相見聞 一帖 本興寺常住」⁽²⁾とよく似ている。

かくして頭師にあつては、これらを隆師の手蹟と判断した。つまり、御真蹟を底本として隆師の直弟が書写したものに、隆師自身が書名の書き込みをしたと考えたのであろう。そしてこの点を評価した頭師は、B本が御真筆と同等の価値を有するものであると判断し、目録にその意を報告したものと考えられる。

しかしながら、B本の価値について、現時点でそれを結論づけることは避けておきたい。今後、題号に関する

筆跡の鑑定や紙質の調査さらには筆者の検討など、写本に対する総合的な研究が待たれるところである。

四、目次と本文中標題との表現の違い

本書の冒頭には、隆師自身による目次が付けられている。目次の各条箇の右上にはやや小さな文字で漢数字が付されており、本文中にも同様の仕方（付）で数字と標題を記しその順に従って論述が進められている。少しく注意したいことは、目次と本文中の標題に若干の違いが確認されることであり、以下にその一覽を載せる。

なお、目次の各条箇の下に見られる「広々・広・中・狭・小」等の表記については、当初は論述内容の分量の違いによるものかと思われたのであるが、分量と表記内容とを対照したところ必ずしもそうとも言えないことが判明するのであり、この点については後日を期したい。

（目次）一約法体仏意機情論（本迹同異）事（広）

（本文）一約法体仏意機情論（本迹同異）事（第四紙）

（目次）二就三種教相論（本迹異）事（広）

（本文）二就三種教相論（本迹異）事（第一〇紙）

（目次）三三種教相之観心重事（付）当宗教観一致姿如何（小）

（本文）三問三種教相之観心重如何（第一二紙）

目次中の「付（付）」については本文中になく、左記の問答だけが記されている。但し、目次では「付（付）」の上、本文では「問 日蓮宗教観一致形如何」の「問」の上にそれぞれ「四」が消去されている。つまり、

当初は別立の項目として論じようとされていたことがうかがえるのである。

問 日蓮宗教観一致形如何

答 此事尼崎流唯授一人之秘曲也 観心本尊抄開目抄在之 口伝云

(目次) 四 就教部權実本迹三論三本迹同異二事小

(本文) 四 就教部權実本迹論本迹同異事 (第一三紙)

(目次) 五 約教約部相如何小

(本文) 五 問 約教約部相如何 (第一四紙)

(目次) 六 以約教釈ニ為今經能釈ニ論本迹同異ニ其姿如何其

(本文) 六 問云 以約教釈ニ為今經能釈ニ論本迹同異 其形如何 (第一五紙)

(目次) 七 以約部釈ニ消今經ニ時ハ本迹ハ同歟異歟其

(本文) 七 問云 以約部釈ニ消今經ニ時ハ本迹ハ同歟異歟 (第一七紙)

(目次) 八 以本迹教釈ニ消法花經ニ時論ニ本迹勝劣義ニ可云耶中

(本文) 八 問 以本迹教釈ニ消法花經ニ時論本迹勝劣義 可云耶 (第一八紙)

(目次) 九 当宗本尊南無妙法〇經ハ教部權実本迹中ニハ 自何ニ出生スル耶中

(本文) 九 尋云 当宗之本尊之南無妙法蓮花經ハ教部權実本迹中ニハ 自何ニ出生スル耶 (第二二紙)

(目次) 十 一切衆生最初下種ハ必限本門其

(本文) 十 一切衆生最初下種必限本門事 (第二三紙)

(目次) 十一 諸經ハ五味法花經ハ五味主事其

（本文）^{十一} 諸經五味法花經五味主事（第三五紙）

（目次）^{十二} 当宗教相の事理二教中ニハ何耶小

（本文）^{十三} 当宗教相者事理二教中何耶事（第四〇紙）

（目次）^{十三} 当宗独談ニ事相教相ニ其所以如何中

（本文）^{十三} 尋云 日蓮宗独談事相教相ニ其所以如何（第四〇紙）

（目次）^{十四} 在世教相ハ論ニ本迹同ニ滅後流通教觀ハ論ニ本迹異ニ事中

（本文）^{十四} 在世教相論迹本同ニ滅後流通教觀論本迹異ニ事（第四三紙）

（目次）^{十五} 在世四教五時滅後流通四教五時不同事中

（本文）^{十五} 在世四教五時滅後流通五時四教不同事（第四八紙）

（目次）^{十六} 約ニ教機時国教法流布ニ成本迹勝劣義ニ事中

（本文）^{十六} 約教機時国教法流布ニ成本迹勝劣義事（第五〇紙）

（目次）^{十七} 以ニ迹門不変真如本門隨緣真如一頭本迹実義ニ事中

（本文）^{十七} 以迹門不変真如本門隨緣真如一頭二本迹実義ニ事（第五二紙）

（目次）^付 迹門理円本門事円事

（本文）^付 迹門理円本門事円事（第五四紙）

（目次）^{十八} 迹門意從因至果故本迹一致本門意談從果向因故本迹勝劣事中

（本文）^{十八} 迹門意從因至果故本迹一致本門意談從果向因故本迹勝劣事（第五五紙）

（目次）^{十九} 迹門断道向ニ而ニ不ニ本門断道ハ向ニ不ニ而ニ故論本迹勝劣ニ事中

(本文) 一九 迹門断道向而二不二 一本門断道向不二而二一 故論本迹勝劣事 (第五七紙)

(目次) 二〇 諸仏出世自在世^二以滅後本門八品^一為出世本懷事 ^{五七}

(本文) 二一 諸仏出世自在世以滅後本門八品為出世本懷事 (第五八紙)

(目次) 二二 本門明本涅槃妙故勝^レ迹門^三不明之^レ故劣事 ^{五八}

(本文) 二三 本門明本涅槃妙故勝迹門不明之故劣事 (第六三紙)

【法華宗本門戒体見聞】調査報告

一、隆師の書込等について

本書は、隆師直弟による写本(本抄の定本)である。書誌的事情の詳細については「日隆²」の「解題」を参照されたい。なお本書の状態について、文字の解説に関わるほどのものではないが、虫食い等による若干の痛みが確認されることを報告しておく。

特記したい点は、わずかに一箇所ではあるが、このたびの調査によつて隆師の書込が新たに確認されたことである。従来確認されていた書込箇所を含め、その丁数と内容をあげれば次の通りである。なお、隆師の手蹟は傍点で示した。

第一帖二七丁ウ(小乗権大乘迹門本門戒体色[・]心事)

同 三四丁ウ（尋云於尔前受小乘戒・人開会后更受円頓戒・欺如何）

第二帖一丁ヲ（多宝仏分身以下ノ尊証トシテ一會ノ大衆皆在虚空ヲ持）

同 四〇丁ヲ（一念信解者即是本門立行之首ヨリ 依ニ高祖大）

第三帖三五丁ウ（皆是寂光也 所居既浄土也 能居之人豈非仏ニ耶）

右の書込のうち第一帖と第二帖の全四箇所については、これまでの調査・研究（大平宏龍稿「本門戒体見聞」について）「日蓮教学研究所紀要」第二十号所収・平成五年）において隆師の手蹟であることが指摘されている。その手蹟の存在は、隆師が親から校正したことを物語るものであり、直弟によるこの清書本が隆師真蹟本と同等の価値を有するものであるという評価の根拠になるものである。

かくして第三帖については隆師の手蹟が未確認とされていたのであるが、このたびの調査で新たに第三帖にも隆師自身による書込が確認されたのであり、如上の理由からその意味は大きいといえる。

二、筆者について

本書の筆者については隆師の直弟子である「智本師の清書本」と推定されているが、書風と送り仮名の特徴（第一・三帖は「給」を多用、第二帖は他帖に使用例が極端に少ない「玉」「共」を使用する等）からして、第一帖・第三帖と第二帖とは異筆と思われることを記しおきたい。この点、本書は隆師直弟の書写にかかるもので、複数名による作業であるとの推定を裏付けられるものといえよう。

三、目次と本文中標題との表現の違い

本書の目次と本文中の標題には若干の違いが確認される。また第二帖に、目次に標題を掲げながらも本文中にないものが二箇所確認される。以下、目次と本文中の標題を並記する。

第一帖

(目次) 小権迹本戒事

(本文) 小権迹本戒事

(目次) 於戒在世滅後不同有之耶

(本文) 於戒在世滅後不同有之耶事 (二五ヲ)

(目次) 小権迹本戒体事

(本文) 小乗権大乘迹門本門戒体色心事 (色心) は隆師による後補・二七ウ)

(目次) 本門戒体巨色心耶

(本文) 本門戒体巨色心耶事 (三〇ウ)

(目次) 三学勝劣事

(本文) 三学勝劣事 (三三ウ)

(目次) 小乗戒人來法花開會後別受円戒耶

(本文) 小乗戒人來法花開會後別受円頓戒耶 (三四ウ)

（目次）待絶二妙戒者戒体戒法中何耶

（本文）待絶二妙戒者戒体戒法中何耶（三二六ヲ）

（目次）以三觀三千互成戒体戒法事

（本文）以一心三觀一念三千互成戒体戒法事（戒体）は後補・三九ヲ）

（目次）戒体即身成仏事

（本文）戒体即身成仏事（四〇ヲ）

（目次）名字即位即身成仏事

（本文）名字即位即身成仏事（四二ヲ）

第二帖

（目次）三学即身成仏事

（本文）三学即身成仏下（三三ヲ）

（目次）本門意以折伏修行為戒体二耶

（本文）本門意以折伏二為戒体二耶事（四ヲ）

（目次）十如是中以一如是円頓戒口伝事

（本文）十如是中以一如是円頓戒口伝事（五ウ）

（目次）以題目為言說一心三觀一念三千一事

（本文）以題目為言說一心三觀言說一念三千事（六ヲ）

(目次) 付六即円戒法体行相事

(本文) 付六即円戒法体行相口伝事(七ヲ)

(目次) 有何故正依法花傍依梵網釈耶

(本文) 有何故正依法花傍依梵網釈耶(八ヲ)

(目次) 本門円戒正依経寿量品傍依経方便品事

(本文) 本門円戒正依経寿量品傍依経方便品事(八ウ)

(目次) 正依経寿量品傍依経宝塔品事

(本文) 正依経寿量品傍依経宝塔品事(二〇ウ)

(目次) 正依経本門八品傍依経宝塔品事 付テリ普賢経傍依経事

(本文) 正依経八品傍依経宝塔品 付テリ普賢経傍依経事(二二ヲ)

(目次) 宗意以梵網戒体為傍依経一耶

(本文) 宗意以梵網戒体為傍依経一耶(二三ヲ)

(目次) 伝教大師円戒傍依経取梵網事有深故耶

(本文) 山家大師円戒傍依経取梵網経一事有深故一耶事(二五ヲ)

(目次) 本門円戒教主事

(本文) 本門円戒教主事(二八ヲ)

(目次) 約報応二身論種熟脱事

(本文) なし(但し、「本門円戒ノ教主事」において報応二身の種熟脱を論じる)

（目次） 迹門円頓戒教主事

（本文） 迹門円頓戒教主事（二〇ウ）

（目次） 天台宗意分別円頓菩薩戒仏戒事

（本文） 天台宗所談円頓菩薩戒円頓仏戒事（二二ウ）

（目次） 本門意以迹門円戒名一得永不失戒耶

（本文） 本門意以迹門円戒名一得永不失戒一事（二五ウ）

（目次） 本門円頓戒々機事

（本文） 本門円頓戒々機事（二八ウ）

（目次） 本門円戒伝受時何以心地發得戒体耶

（本文） 本門円戒伝受時何以心地發戒体耶（二九ウ）

（目次） 以折伏為戒行用僧形耶

（本文） 以折伏為戒行時用僧形耶（三〇ウ）

（目次） 本門円戒意仏戒菩薩戒中何勝耶

（本文） 本門円頓戒意仏戒菩薩戒中何勝耶（三三ウ）

（目次） 本門円頓菩薩戒円頓仏戒事

（本文） 本門円頓菩薩戒円頓仏戒事（三五ウ）

（目次） 以種熟脱配六即事

（本文） 以種熟脱配六即事（三八ウ）

(目次) 本門意一切諸仏居名字即事

(本文) なし(但し、第三帖「本因妙伝戒々体者題目与一念三千中何耶」の末尾に少しく言及)

(目次) 久遠本因妙与末法名字即同異事

(本文) 久遠本因妙与末法名字即同異事(三九ウ)

第三帖

(目次) 名字觀行作法受得有無事

(本文) 名字觀行作法受得有無事(二ウ)

(目次) 依時機邪正明戒持犯事

(本文) 依時機邪正明戒持犯事(三ウ)

(目次) 題目受持外別論伝戒義耶

(本文) 宗意題目受持外別論伝戒義耶(五ウ)

(目次) 本門円戒伝受時用作法受得耶

(本文) 本門円頓戒伝受時用作法受得義耶事(六ウ)

(目次) 依正像末時機論作法受得不同事

(本文) 依正像末時機作法受得論不同事(七ウ)

(目次) 約名字觀行論戒持犯事 付名字不退事

(本文) 論戒持犯者名字觀行中何耶 付名字即不退事(八ウ)

〔目次〕 本門円戒持犯事

〔本文〕 本門円頓戒持犯事（二一ウ）

〔目次〕 十重禁戒事

〔本文〕 十重禁戒事（二二ウ）

〔目次〕 本門意以三聚淨戒為傍依戒耶

〔本文〕 本門意以三聚淨戒為傍依戒耶（二六ウ）

〔目次〕 本門三ヶ秘法口伝事

〔本文〕 本門三ヶ秘法口伝事（一七ウ）

〔目次〕 本因妙菩薩戒時不用伝戒師耶

〔本文〕 本因妙菩薩戒時不用伝戒師事（二三ウ）

〔目次〕 本因妙伝戒時受戒師事

〔本文〕 本因妙伝戒時受戒師事（二九ウ）

〔目次〕 本因妙伝戒々々体者題目与一念三千中何耶

〔本文〕 本因妙伝戒々々体者題目与一念三千中何耶（三二ウ）

〔目次〕 本因妙伝戒時用作法受得義耶

〔本文〕 本因妙伝戒時用作法受得儀式耶（三三ウ）

〔目次〕 本門戒壇四種仏土中何耶

〔本文〕 本門戒壇者四種仏土中何耶（三五ウ）

【付記】

このたびの調査に際し御聖教閲覧の許可を下さり、貴重な時間を割いて御教示を下さった大本山本興寺御貫首小西日邊猥下に対し甚深の謝意を表します。また、法華宗教学研究所長大平宏龍先生には、多忙を極めておられる最中、御真蹟の読み方等について懇切なるご指導を頂いた。衷心より厚く御礼を申し上げます。

註

(1) B本には次の識語がみられる。

奉修復玄義教相見聞 一帖

貞享三^{丙寅}年正月廿二日

日頭花押

(2) これにつき写本(B本)では、もとは表紙であったと思われる用紙に同様の記載が見られることが興味深い。但し、真蹟本では「玄義教相見聞 一帖」と「本興寺常住」とが縦一列に表記されているところ、写本では用紙の中央に書名を書き、左下に所蔵を置くという違いがある。

(3) 大平宏龍稿「慶林日隆著『玄義教相見聞』について」(『日蓮教学研究所紀要』第三〇号所収)註(6)は、「大本山本興寺寺宝目録」所載の本書の名称に訂正を加えている。

「玄義教相見聞」(広々、広、中、狭、小)一覽

条箇番号	紙数	行数	比較標示(目次)
1	6	113	広
2	3,5	60	広
3	0,5	9	小
付たり	-	2	小
4	1	17	小
5	1	20	小
6	2	45	狭
7	2	38	狭
8	2,5	57	中
9	2	43	中
10	13	219	広
11	5	121	広
12	1	12	小
13	2,5	63	広
14	4,5	71	広
15	3	68	広
16	2	43	中
17	1,5	35	広(「中」ケシ)(※1)
付たり	1,5	43	-
18	2	40	中
19	1,5	28	中
20	5	114	広々
21(※2)	3	61	広

標題は一行と数えた。また、本文中に削除された文章については行数に加えていない。

料紙の幅がまちまちであるため、紙数はおおよその数を示すものである。

(※1) 条箇第17は、「付たり」(43行)を入れることで分量が多くなり、「中」を「広」に変更か。

(※2) 大平宏龍先生の御教示によるところ、巻末の「私云」(第64,65紙)の内容は条箇第21に関するものとみるよりもむしろ本書を総括する内容と考えるべきであろうとのことであった。そうした場合、条箇第21は1,5紙28行となる。

行数による並べ替え

条箇番号	紙数	行数	比較標示 (目次)
(3) 付たり	-	2	小
3	0,5	9	小
12	1	12	小
4	1	17	小
5	1	20	小
19	1,5	28	中
7	2	38	狭
18	2	40	中
9	2	43	中
16	2	43	中
6	2	45	狭
8	2,5	57	中
2	3,5	60	広
21 (※2)	3	61	広
13	2,5	63	広
15	3	68	広
14	4,5	71	広
17 (含付たり)	3	78	広 (「中」ケシ) (※1)
1	6	113	広
20	5	114	広々
11	5	121	広
10	13	219	広

「玄義教相見聞」・「法華宗本門戒体見聞」調査報告（平島盛龍）

- (5) 大平宏龍稿「日隆聖人と東国法華宗」（興隆学林紀要）創刊号所収・昭和六一年）
- (6) 大平宏龍稿「本門戒体見聞」について」（日蓮教学研究所紀要）第二十号所収・平成五年）
- (7) 既完本（「桂林学叢」第六号別冊・「佛立宗義書」第二卷）ではこれを「広」とする。しかし真蹟は明らかに「広」とあり、写本（B本）も同様である。